

Intensive parenting attitude(育児への徹底性)尺度の開発と 養育行動との関連の検討

愛媛大学教育学部 江上園子

Constructing a Japanese version of the Intensive Parenting Attitude Questionnaire (IPAQ) and investigating its relationship with child- rearing behavior

Faculty of Education, Ehime University, EGAMI, Sonoko

要約

本研究は Intensive parenting attitude questionnaire (IPAQ)の日本語版を作成し、“intensive parenting attitude” (育児への徹底性)と養育行動との関連を明らかにすることが目的である。母親が子どもの養育の責任を一手に担い、自分の時間も労力も資金も割くことを当然視する“intensive mothering” (Hays,1996)の問題がアメリカをはじめ先進諸国で提起されはじめている。我が国の母親をとりまく子育てをめぐる問題の整理や見直しのためにも、その傾向が養育行動に影響を与えるのか、824名の母親を対象として検討した。その結果、IPAQのすべての下位尺度が母親のいずれかの養育行動(肯定的な養育行動・否定的な養育行動・関与/干渉・意思の尊重)に影響を及ぼすことが明らかになった。

【キー・ワード】 intensive parenting attitude (育児への徹底性), 母親, 養育行動

Abstract

The aim of this study was to construct a Japanese version of the intensive parenting attitude questionnaire (IPAQ) and examine its correlation with child-rearing behavior. Hays (1996) introduced “Intensive Mothering”, the idea that child-rearing is primarily a maternal responsibility and that mothers are to devote their time, energy, and money to their children. In developed countries including the United States, scholars suggest that this concept has negative effects on mothers. To address this maternal problem concerning parenting in Japan, I investigated the effects of “Intensive parenting attitude” on child-rearing behavior based on the responses of 824 mothers. The results showed that all subscales of IPAQ affected any one of the mothers’ four child-rearing behaviors (positive parenting, negative parenting, involvement/overprotection, and respect for will).

【Key words】 intensive parenting attitude, mother, child-rearing behavior

問題と目的

養育者が子どもに時間も労力も資金も割いた徹底的な育児を行うことを“intensive parenting” (Hay, 1996)と呼ぶが、アメリカでは現在、母親が抱くこの傾向の強さが母親の精神的な健康を阻害するという結果が出ている(Rizzo, Schiffrin, & Liss, 2013)。女性の社会進出の必要性が謳われ実際に先進諸国ではその動きが著しい中でも、実際には母親の育児への徹底的な態度を支持する信念が総じて強固であり、それによってストレスを抱えてしまう母親たちの存在が世界的に問題視されつつあるのだ。したがって、現代の日本の子育てを見直すためにも、“intensive parenting”すなわち「育児への徹底性」の実態とその影響を海外と比較しながら明らかにすることが不可欠であろう。とくに、海外でも明らかになっていない点として、この“intensive parenting”が実際の養育行動にどのように作用しているかという因果関係が挙げられよう。Wall (2010)はカナダの母親を対象にして行ったインタビュー調査から、“intensive parenting”が子どもの知的な発達において有用であるという思い込みによって実際にそのように徹底的な子育てを行うようになっていく姿を描いた。ただしこの研究は、インタビュー調査による少数の事例をつまびらかにしたものであり、統計的に“intensive parenting”の養育行動への影響を実証したものではない。Schiffrin, Godfrey, Liss, & Erchull (2015)は母親の“intensive parenting”の高さが自分の子どもに生じる問題を予期して解決をはかるという“anticipatory problem solving”, いわゆる「先回り育児」に近い養育行動との関連を明らかにしているが、これは養育者が取り得る養育行動のうち、“intensive parenting”と関連が想定される一部の養育行動だけを取り上げているものであり、これまで、全般的な養育行動との関連について検討している研究は国内・海外ともに見られない。

そこで“intensive parenting”が実際にどのような養育行動に影響を及ぼし得るのか検討するため、本研究では中間報告(江上, 2018)において“Intensive Parenting Attitudes Questionnaire”(IPAQ) (Liss, Schiffrin, Mackintosh, Miles-McLean, & Erchull, 2013)の日本語版を作成した。そして今回の最終報告ではこのIPAQ(育児への徹底性)が全般的な養育行動にどのような影響を与えるのか、明らかにすることとした。母親が子どもに取りうるさまざまな側面を含んだ広く全般的な養育行動を測定するために、伊藤・中島・望月・高柳・田中・松本・大嶽・原田・野田・辻井(2014)によって信頼性・妥当性共に確認できている「肯定的・否定的養育行動尺度」を幼児版に改変して用いることにする。なお、本研究では“intensive parenting”が純粋に養育行動に影響するかどうかを分析するために、母親が受けている周囲からのソーシャルサポートを統制したうえで、“intensive parenting”の各下位尺度が全般的な養育行動にどのように作用するか検討することとする。ところで、Rizzo, et al. (2013)や Schiffrin, et al.(2015)のように“intensive parenting”とその他の変数との因果関係について分析する調査はすべて同時相関的なものであった。そのため、厳密な意味では“intensive parenting”が母親の精神的な健康や養育行動に影響を与えているとは言えない。したがって本研究では、IPAQ得点は中間報告時のものを用いることで全般的な養育行動度とのデータ収集の時期の間隔をあけ、縦断研究の手法で検証することにした。

本研究の結果から、母親のみならず子どもにまで関係する“intensive parenting”の影響力の大き

さを調べ、母親を追い込んでしまう、あるいは母親が自ら背負い込んでしまう「育児への徹底性」が我が国においてはどのように捉えうるのか、考察していきたい。

方 法

1. 調査時期や対象者および手続き

2017年11月30日および12月1日に、乳幼児を養育中の全国の母親1648名を対象としたインターネットによる一回目のアンケート調査(調査1;中間報告で実施済み)を行った。アンケート用紙を著者が考案のうえ、インターネット上でアンケート調査を行う業者とやりとりを行い、調査の実施は業者に任せた。二回目のアンケート調査(調査2)は4月28日～4月30日の間に、調査1に回答済みの協力者を対象にしたうえで同様の手続きで行った。協力者は乳幼児を養育中である全国の母親824名である。本研究では、調査1と調査2のすべてについて回答を得た母親824名を対象とした。

2. 調査内容および質問項目

①調査1:質問項目はIntensive parenting attitude (Liss, et al., 2013)の25項目を和訳して「育児への徹底性」と邦題をつけたもの(6件法)と、「母性愛」信奉傾向尺度(江上, 2005, 2007)13項目(5件法)、育児への否定的・肯定的感情尺度(荒牧・無藤, 2008)16項目(4件法)、早期教育評価尺度(清水・相良, 2011)25項目(4件法)ならびに調査対象者の年齢や就業形態・教育歴などのフェイスシート項目である。Intensive parenting attitudeについては尺度筆頭作成者のLiss, M. から日本語への翻訳と尺度使用の許諾を得、筆者が和訳したものを心理学の翻訳専門家に添削を依頼したうえで、別の英語ネイティブの専門家がバックトランスレーションを行ったうえで日本語の質問項目を決定した。Intensive parenting attitude(育児への徹底性)はEssentialism(本質主義:女性が生来的に子育てに向いているという考え)・Fulfillment(達成感:親役割を受容し満足感を伴うものであるとする考え)・Stimulation(刺激:子どもに知的な刺激や教育的機会を与えるべきとする考え)・Challenging(困難:子育ては疲労や困難を感じさせるものだという考え)・Child-Centered(子ども中心:親自身よりも子どもの都合や要求を優先させるべきであるという考え)という5つの下位尺度から構成されている。

②調査2:「ソーシャルサポート尺度」(岩佐・権藤・増井・稲垣・河合・大塚・小川・高山・牟田・鈴木, 2007)12項目(7件法)ならびに「肯定的・否定的養育行動尺度」(伊藤ら, 2014)35項目(4件法)を使用した。ソーシャルサポート尺度の項目は「私には困ったときにそばにいてくれる人がいる」・「私には私の気持ちについて何かと気づかってくれる人がいる」などを含む。肯定的・否定的養育行動尺度は6因子構造で、「関与・見守り」・「肯定的応答性」・「意思の尊重」・「過干渉」・「非一貫性」・「厳しい叱責・体罰」の下位因子からなるものである。項目例はそれぞれ「子どもが遊ぶ友達のことをよく知っている」・「子どもが何かうまくできたときには、ほめてあげる」・「できるだけ子ども自身の意思を尊重する」・「自分がいないと、子どもは何もできないと感じる」・「子どもへの叱り方が、自分の気分によって変わる」・「子どもが悪いことをしたときには、大声で怒鳴る」等である。なお、肯定的・

否定的養育行動尺度は小学生から中学生の子どもを持つ養育者を対象に作成されたことから、乳幼児を持つ母親を対象とした本研究とは異なる。そのため、項目を乳幼児の養育者に適用させるべく、尺度作成者の許可を得て文言を適宜、修正した。その他、調査 1 と同様に母親の年齢や就業形態・世帯年収・教育歴などをたずねるフェイスシート項目も含む。

結 果

1. 協力者の特徴

協力者の平均年齢は 34.8 歳($SD: 5.1$)であった。就業形態は、フルタイム勤務が 112 名、パートタイム・アルバイトが 166 名、無職(専業主婦)が 468 名、その他(産休・育休中やフリーランス)が 78 名であった。教育歴については、中学校卒業者が 18 名、高校卒業者が 194 名、専門学校卒業者が 157 名、短大卒業者が 139 名、大学卒業者が 304 名、大学院修士課程修了者が 11 名、大学院博士課程修了者が 1 名であった。世帯年収の平均値については 572.4 万円($SD: 263.6$ 万)であった。なお、協力者の属性別で IPAQ の得点が異なるかどうか、すべての下位因子得点について分析したところいずれも有意な差は見られなかったことより、以後の分析・検討はすべての母親をまとめた形で行うこととした。

2. 各尺度得点の算出

①Intensive parenting attitude(IPAQ) : それぞれの下位因子で Cronbach の α 係数を求めた。その結果、信頼性($N=824$)は「本質主義 6 項目($\alpha=.73$)」・「達成感 3 項目($\alpha=.75$)」・「刺激 3 項目($\alpha=.57$)」・「困難 6 項目($\alpha=.64$)」・「子ども中心 3 項目($\alpha=.68$)」であった。信頼性を確かなものとするために、「本質主義」から 2 項目、「達成感」から 1 項目、「刺激」から 1 項目を削除した。最終的に採用した因子項目ならびに調査 1 における各下位因子の得点の平均値(SD)は表 1 の通りであった。

表 1 IPAQ の項目内容と平均点 (SD) $N=824$

下位尺度名	項目番号	項目内容	平均値(SD)
本質主義 ($a = .73$)	2	父親もそれなりにうまくやれるかもしれないが、一般的に母親の育児ほどはうまくない	4.0(1.27)
	4	父親も大事な存在であるが、結局は子どもにとってより必要なのは母親である	3.9(1.22)
	6	結局のところ、どんな子どもに育つかどうかは母親の責任である	3.3(1.15)
	17	男性はうまれつき、子どもに何をしてあげたらいいかわかっていない	3.5(1.23)
	20	男性は、育児について特別にその方法を教えてもらおうようなことでもなければ、子どもをうまく育てることができない	3.3(1.19)
	合計		22.1(4.73)
達成感 ($a = .75$)	7	親になることは人が経験できることの中でもっとも素晴らしい喜びを与えてくれる	4.5(1.13)
	14	赤ちゃんを抱くことは親にもっとも高い満足感をもたらすはずである	4.5(1.12)
	18	幼い自分の子どもを見つめているとき、親は完全に満たされた気持ちになるものである	4.1(1.12)
	合計		13.1(2.74)
刺激 ($a = .57$)	3	読書やクラシック音楽の鑑賞のように、親は子どもが生まれる前から知的な刺激を与え始めるべきである	3.3(0.99)
	9	子どもにとって、夢中になれて刺激を受ける塾やお稽古ごとなど、諸々の活動に参加することは重要である	4.2(0.91)
	21	子どもにもっともよい教育的機会を見つけてあげることは幼児期という早期から重要である	3.8(1.02)
	合計		11.3(2.14)
困難 ($a = .64$)	5	親になれば、子どもと一緒にいないときでも気が休まることはない	3.9(1.24)
	8	子育てはとても疲れるものである	4.5(1.07)
	13	子育ては世界中でもっとも大変な仕事である	4.1(1.25)
	15	親になるということは、自分のための時間がまったくなくなるということである	3.9(1.20)
	22	良い親になることは、大企業の幹部になることよりも難しい	4.0(1.29)
	23	有能な親になるためには、いろんなスキルを持たなければならない	3.1(1.13)
	合計		23.4(4.31)
子ども中心 ($a = .68$)	11	子どもの予定は親の都合よりも優先されるべきである	3.9(1.03)
	19	親にとって子どもは関心の中心であるべきである	4.2(1.08)
	24	子どもの要求は親のものよりも先に満たされるべきである	3.7(1.07)
	合計		11.8(2.49)

②ソーシャルサポート尺度：主成分分析の結果、1次元性が確認されたため、尺度得点は12項目を単純加算して算出した。Cronbachの α 係数は $\alpha=.94$ であった。

③肯定的・否定的養育行動尺度：主成分分析とその解釈の結果、4因子構造が推測されたことより、因子数を4に指定して因子分析(重みづけなし最小二乗法・プロマックス回転)を行った。先行研究の因子分析結果も参考にしながら、「肯定的な養育行動($\alpha=.83$)」・「否定的な養育行動($\alpha=.90$)」・「関与・干渉($\alpha=.84$)」・「意思の尊重($\alpha=.63$)」の4因子構造を採用した。肯定的な養育行動は、子どもとスキンシップを取ったり休日是一緒に遊んだりなどの子どもへの肯定的な関わり方全般である。否定的な養育行動は、子どもへの叱り方が自分の気分によって変わったりしつげとして子どもが悪いことをしたときに大声で怒鳴ったりするなどの否定的な関わり方全般である。関与・干渉は、子どもの園での出来事や友達のことについてよく話すなどの関与の側面と子どもが遊ぶべき友達を言い聞かせるなどの干渉の側面を持つものである。意思の尊重は、子どもの思いや自律性を尊重する関わり方である。

3. 変数間の相関

すべての尺度の下位因子得点間の相関係数を算出し、表2に示した。

表 2 変数間の単純相関係数

	本質主義	達成感	刺激	困難	子ども中心	ソーシャルサポート	肯定的な養育行動	否定的な養育行動	関与・干渉	意思の尊重
本質主義	1									
達成感	.155**	1								
刺激	.259**	.255**	1							
子ども中心	.286**	.493**	.316**	.310**	1					
ソーシャルサポート	-.153**	.344**	.100**	-.129**	.129**	1				
肯定的な養育行動	-.053	.389**	.115**	-.013	.239**	.470**	1			
否定的な養育行動	.117**	-.114**	-.022	.168**	-.098**	-.183**	-.210**	1		
関与・干渉	-.017	.081*	0.066	-.053	-.048	.108**	.122**	.215**	1	
意思の尊重	-.020	.157**	.101**	0.026	.131**	.249**	.438**	-.140**	.125**	1

** $p < .01$, * $p < .05$

4. 階層的重回帰分析

肯定的・否定的養育行動尺度得点の4つの下位因子尺度得点を目的変数にし、Step1でソーシャルサポート尺度得点を制御変数として投入し、Step2でIPAQの「本質主義」・「達成感」・「刺激」・「困難」・「子ども中心」を説明変数として投入した階層的重回帰分析を行った。その結果、すべての養育行動の下位因子尺度において、ソーシャルサポートを統制したうえでもIPAQのいずれかの因子の影響が確認できた。結果は表3に示す。

表 3 階層的重回帰分析の結果

	肯定的な養育行動		否定的な養育行動		関与・干渉		意思の尊重	
	ΔR^2	β	ΔR^2	β	ΔR^2	β	ΔR^2	β
Step1	.221 **		.033 **		.012 **		.062 **	
ソーシャルサポート		.470 **		-.183 **		.108 **		.249 **
Step2	.067 **		.042 **		.018 *		.014 *	
ソーシャルサポート		.372 **		-.119 **		.078 *		.221 **
本質主義		-.061 +		.062		.019		-.040
達成感		.221 **		-.036		.096 *		.035
刺激		.006		-.029		.082 *		.048
困難		.003		.176 **		-.053		.032
子ども中心		.097 **		-.127 **		-.120 **		.071 +

* $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

考 察

本研究の目的は、Intensive parenting attitude(育児への徹底性)尺度の開発と、それが母親の養育態度に与える影響を解明することであった。そのため、調査1でIPAQ日本語版を完成させ、調査2ではその得点と養育行動との関連について分析を行った。結果として、本研究で調査したすべての養育行動において、ソーシャルサポートを統制したうえでも、母親のIntensive parenting attitude(育児への徹底性)が影響を与えていることがわかった。以下に、それぞれ具体的に検討していく。

肯定的な養育行動に影響を与えているものは、達成感と子ども中心、そして本質主義であった。達成感の子育てで生じる喜びを当然視するような尺度項目から成っており、子ども中心は子どもを自分よりも優先する姿勢が望ましいとする尺度項目から構成されている。そのため、このような信念・態

度が実際に子どもに対して肯定的な関わりを促しうるということである。逆に、性別によって子育ての適性が異なるという本質主義の姿勢は、肯定的な接し方を低減させている。本質主義の考えのもとにいる母親は、子どものことで何か悩みや困難があってもパートナーである父親に頼らずに自分ひとりでその責任を引き受ける態度が予想されることから、肯定的な関わりを持つ余裕がない姿が推測される。一方、否定的な養育行動に影響を及ぼすものは、子ども中心と困難である。子ども優先的な態度は、母親の子どもへの否定的な関わりを抑制するが、子育ては難題であり苦勞を伴うものであるという信念は、否定的な関わりを促している。子どもの存在を常に優先する態度は、子どもが何か悪いことをしても否定的な行動を思いとどまらせる作用があるということ、おそらくは日々の子育てで困難を抱え続けた母親は、子どものしつけの際につき否定的な行動を多くとってしまうという影響経路が想定された。関与・干渉においては、子ども中心、刺激、達成感が影響を与えていた。子ども中心の態度は、子どもの思いや意図を自分のものとは別のものとしてより重要視することから、関与・干渉を可能な限り控えるという行動に影響しているのだろう。逆に、刺激と達成感は関与・干渉を促している。刺激は子どもに対して意識的に刺激に富んだ関わりや早期教育を行うことが重要であるという信念であることから、子どもにそれだけ関与・干渉する行動を増加させるのであろう。達成感は子どもと接することが自分の喜びや満足感を向上させるという態度であることから、やはり子どもへの関与・干渉を促すのだと想定される。ところで、Schiffirin, et al.(2015)で取り上げられていた“anticipatory problem solving”という養育行動は、本研究の中ではこの関与・干渉にもっとも近いと考えられる。しかし、Schiffirin, et al.(2015)の研究と本研究では若干の差異がある。とくに、子ども中心は“anticipatory problem solving”に対しては正の影響が見られたが、本研究の関与・干渉にはマイナスの影響を及ぼしていた。もちろん項目内容の違いによるものとも思われるが、そこには幾分か文化差による影響があるものとも推測される。最後に意思の尊重であるが、子ども中心が影響しているという結果となった。子ども側の思いや希望を自分とは独立して重視する姿勢であることから、やはり子どもの意思や行動を尊重して子どもの自律性にまかせるような養育行動に作用するのであろう。

本研究から、母親の Intensive parenting attitude(育児への徹底性)は本研究で取り上げた全般的な養育行動のすべての側面に作用しうるということが認められた。ことに、本研究は母親が有していた Intensive parenting attitude(育児への徹底性)がのちの養育行動に作用するという、時間の経過を含めた縦断研究であり、これまで Schiffirin,et al.(2015), Rizzo, et al. (2013)や、江上(2005, 2007, 2013)の研究で見られた同時相関的な研究ではない。したがって、Intensive parenting attitude(育児への徹底性)が実際の子育てへ及ぼす影響力を実証した点は意義があると言えるだろう。

しかしながら、本研究にはいくつかの課題もある。一点目は、IPAQの日本語版を作成する際の手続きである。本研究では海外との比較も試みる可能性があったため、因子構造や各因子に含まれる項目について、なるべく原文に忠実に倣うトップダウン式の方法を採用した。そのため、我が国の母親の実態やデータからボトムアップ的に尺度を作成したわけではないことから、今後、Intensive parenting attitude(育児への徹底性)について、我が国の実情により合わせた尺度構成をはじめから見直していく必要があるかもしれない。Loyal, Dalley, & Rascle(2017)は、IPAQのフランス語版を

作成する際、フランスの女性は母乳育児や子どものボンディング、子どものために自分を犠牲にすることにあまり重きを置かないという特徴を鑑み、半構造化面接を行った結果から独自の項目を付加してIPAQのフランス語版を完成させている。もちろん本来のIPAQとは異なる項目や因子構造となっているが、それぞれの文化や社会により適した尺度としてはこちらの方がより有用であると言えるであろう。二点目は、本研究の協力者の特徴・属性に見られた若干の偏りである。地域には偏りなく、日本全国の乳幼児を養育中の女性を対象とできたことは有意義であったが、やはり女性たちの就業形態としては専業主婦が半数以上を占めた。すべての下位因子得点で就業形態による有意な差は見られなかったとしても、サンプル数の違いによって正確な結果とならなかったのかもしれない。フルタイムで乳幼児を養育中の女性の多忙さは類を見ない(Allen & Finkelstein, 2014)としても、そのような女性たちからも協力を得られるような工夫や戦略のようなものは今後の調査で外せない視点であろう。Ennis (2014)も、今後の研究ではすべての階層・人種に属するあらゆる特徴を持つ母親を対象とした“声”を拾っていくことが重要であると指摘している。

本研究において見出された結果としては、Intensive parenting attitude(育児への徹底性)が養育行動においてプラスにもマイナスにも働かうるというものであった。今後、本研究の結果と課題を踏まえながら研究を続行していく際には、我が国におけるIntensive parenting attitude(育児への徹底性)の是非をより深く考察していく必要がある。その流れの中では、海外と同様に、子どもにとっての視点だけではなく母親にとっての観点がまずは求められるところだろう。どのような社会が子育てをしやすいのか、母親の心理的な健康を維持できるのか、今後は実践的な示唆も含めつつ探究し続けていきたい。

引用文献

- Allen, T. D., & Finkelstein, L. M. (2014). Work-family conflict among members of full-time dual-earner couples: An examination of family life stage, gender, and age. *Journal of Occupational Health Psychology*, **19**, 376-384.
- 荒牧美佐子・無藤隆 (2008). 育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い：未就学児を持つ母親を対象に *発達心理学研究*, **19**, 87-97.
- 伊藤大幸・中島俊思・望月直人・高柳伸哉・田中善大・松本かおり・大嶽さと子・原田新・野田航・辻井正次 (2014). 肯定的・否定的養育行動尺度の開発：因子構造および構成概念妥当性の検証 *発達心理学研究*, **25**, 221-231.
- 江上園子 (2005). 幼児を持つ母親の「母性愛」信奉傾向と養育状況における感情制御不全 *発達心理学研究*, **16**, 122-134.
- 江上園子 (2007). 「母性愛」信奉傾向が幼児への感情表出に及ぼす影響——職業要因との関連 *心理学研究*, **78**, 148-156.
- 江上園子 (2013). 「母性愛」信奉傾向が夫婦関係と養育態度に与える影響—父親と母親の「母性愛」信奉傾向の交互作用に着目して— *教育心理学研究*, **61**, 169-180.

- 江上園子 (2018). Intensive parenting attitude(育児への徹底性)尺度の開発と養育行動との関連(中間報告) *発達研究*, **32**, 153-156.
- Ennis, L. R. (2014). *Intensive mothering: The cultural contradictions of modern motherhood*. Bradford: Demeter Press.
- Hays, S. (1996). *The cultural contradictions of motherhood*. New Haven, CT: Yale University Press.
- 岩佐一・権藤恭之・増井幸恵・稲垣宏樹・河合千恵子・大塚理加・小川まどか・高山緑・藺牟田洋美・鈴木隆雄 (2007). 日本語版「ソーシャル・サポート尺度」の信頼性ならびに妥当性——中高年者を対象とした検討—— *厚生指標*, **54**, 26-33.
- Liss, M., Schiffrin, H. H., Mackintosh, V. H., Miles-McLean, H., & Erchull, M. J. (2013). Development and validation of a quantitative measure of intensive parenting attitudes. *Journal of Child and Family Studies*, **22**, 621-636.
- Loyal, D., Dalley, A. L. S., & Rasclé, N. (2017). Intensive mothering ideology in France: A pilot study. *L'Encéphale*, **43**, 564-569.
- Rizzo, K. M., Schiffrin, H. H., & Liss, M. (2013). Insight into the parenthood paradox: Mental health outcomes of intensive mothering. *Journal of Child and Family Studies*, **22**, 614-620.
- Schiffrin, H. H., Godfrey, H., Liss, M. & Erchull, M. J. (2015). Intensive parenting: Does it have the desired impact on child outcomes? *Journal of Child and Family Studies*, **24**, 2322-2331.
- 清水美恵・相良順子 (2011). 早期教育評価尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 *日本心理学会第75回大会発表論文集*, 1092.
- Wall, G. (2010). Mothers' experiences with intensive parenting and brain development discourse. *Women's Studies International Forum*, **33**, 253-263.

謝 辞

本研究にご協力下さいましたすべての女性に、心より感謝申し上げます。

